

フランス語の中の英米外来語について

松 田 孝 江

I. 序

現代日本語には、外来語、特にヨーロッパ語が氾濫している。乱用を諫める声はあるが、言葉を法律で取り締まるという発想はない。フランスでは1975年に、言葉に関する法律が出された。必要もないのにむやみに英語を使ってはならないというのである。法律で取り締まらなければならないほど、英米外来語はフランス語にとって脅威なのであろうか。フランス語の中に占める英米外来語の割合、さらにはその実態を概観して、それほどフランス語が危機に瀕しているかどうか検討してみたい。¹⁾

II. 英米語規制の動き

20世紀の科学技術の急速な進歩と、マスメディアの発達で英米語が大量に入ってくると、フランスでは1950年代から、ドゴール大統領の国粋主義と相俟って、これに対する批判が表面化しつつあった。1964年、当時ソルボンヌ大学の比較文学の教授だったR. Etiembleが出した *Parlez-vous franglais ?* は、こうした動きを人々に強く印象づけた。これは、当時のフランスにおける英米語の実態を冷静に分析した上での論述ではなく、誇張した、かなり片寄った内容のものであったが、国語に関する各方面の関心をひくことには、大いに功を奏した。2年後の1966年には、ドゴール大統領・ポンピドゥ首相のもとで、Haute Comité pour la défense et l'expansion de la langue française「フランス語の擁護と普及のための高等審議会」が政令により創設された。創設のいきさつについて、*Parlez-vous franglais ?* の著者は、誇らし気に語っている。²⁾

Moi qui un jour disais au général de Gaulle que le franglais est une affaire d'Etat, et non point, comme il pensait, d'Académie française, d'intendance, dois-je considérer que j'ai œuvré en vain puisque, de Gaulle étant président de la République et Pompidou premier ministre, un *Haut comité* se constitua, sous la présidence de celui-ci, pour traiter justement des questions langagières (...). C'était en 1966. Pompidou m'y nomma tout de go, (...).

「私はかつて、ドゴール大統領に言ったものだ。英語まがいのフランス語 *franglais* は、大統領が考えているように、アカデミー・フランセーズの問題、つまり当該管轄下の問題というより、国家レベルの問題であると。私の働きかけも無駄ではなかったようだ。ドゴール大統領・ポンピドゥ首相のもとで、国語問題を討議するために、首相を議長とする高等審議会が設立された。(中略) それは1966年のことだった。ポンピドゥ首相は、直ちに私をそのメンバーに任命した。」

英語に脅威を感じる人々の気持は、Etiembleのこの文章にはっきり表われている。フラングレは単に言葉の問題にとどまらず、国家の一大事だというのである。

1966年に設立された Haute Comité pour la défense et l'expansion de la langue française の趣旨は、「フランス語の擁護と普及」と謳っているものの、実際には、英米語の侵入にいかに対処するか的一点にあった。Haute Comitéはこの趣旨にそって着々と作業を進め、その成果として、1973年と1975年に言葉に関する政令が出された。1973年の政令は、八分野—ラジオ・テレビなどのマスメ

ディア、建築・公共事業・都市計画、原子力、石油、宇宙、輸送、経済、情報処理—に関する総計 553 語について、英語に対応するフランス語を編み出し、その名詞の性を定め、語義を解説定義し、必要とあらば発音についても言及したものである。1975 年には、保健医療に関する 30 語も追加された。583 語のうち 440 語をリスト 1、残る 143 語をリスト 2 に分類し、リスト 1 は新語、リスト 2 は使用が望まれる語として区別した。保健医療用語に関する政令が出されたのは 1975 年の 1 月であったが、同じ年の 12 月、これを追って下記のような法律が公布された。広告・労働契約・求人案内・公文書・販売文書などは、必ずフランス語で書かなければならない。政令にもとづき、フランス語に存在する単語は(具体的には上記のリスト 1 に属する 440 語を指す)、外国語で表記することを禁ずる。必要とあらば、フランス語の原文に加えて、これを外国語に訳したものを並記してもよい。この法律は、一年の猶予期間の後、1977 年 1 月 1 日に発効し、違反者には、法に照らして 80 フランから 160 フランの罰金が課せられることになっていた。

ちなみに、英語をどのようにフランス語化しているのか、リスト 1、リスト 2 から、われわれにもなじみの深い語を拾ってみよう。

リスト 1

by-pass → dérivation, dressing room → vestiaire, show business → industrie du spectacle, living room → salle de séjour, know-how → savoir faire, rocket → fusée, open ticket → billet ouvert

リスト 2

disk-jockey → animateur, scoop → exclusivité, fair-play → franc-jeu, pocket-radio → récepteur de poche, one man show → (spectacle) solo, duty free shop → boutique franche, jumbo jet → gros-porteur

禁じられた英語を使った者に対して、法律で処罰するという手厳しいやり方は、1539 年にフランソワ 1 世が、ラテン語に代ってフランス語の使用を義務づけた、Villers-Cotterêts の法令以来のものとして大きな反響を呼んだ。町のカフェで、「chien chaud (ホットドッグ)」などと面白半分に注文する市民の姿が見られたのもこの頃である。果して法律の効果のほどはどうだったか。1981 年の年鑑を繙いてみると、毎日何百という違反があった中で、209 件が調書をとられ、119 件が違反を指摘されたという。ただ、実際に裁判にまでもちこまれたものは 1 件だけであった。それは、British Airways が、フランス国内で、英語のみで表記された航空券を発売したとして、有罪になったものだ³⁾。毎日何百件とある違反をすべてとりあげることは実際問題として不可能であり、この法律は、実際の取り締まりよりも、英語乱用の傾向になんとか歯止めをかけるための抑制効果をねらったものといえる。

III. フランス語の語彙中に占める英米外来語の割合

過去の歴史をふりかえてみると、フランス語は英語からことばを採り入れるよりも、英語に提供する方が多かった。11 世紀のノルマン人のイングランド征服は、数世紀もの間、英語がフランス語に屈服する事態をもたらした。Etiemble によれば、現在の事態が続けば、ノルマン征服時とは逆に、フランス語はやがて姿を消し、ザビール・アトランティック語(Etiemble は、フランス語に入ってくる英米系外来語を、軽蔑をこめてこのように呼ぶ。)しか残らないだろうという。政府が法律によって流入を阻止しなければならないほど大量の英語が、実際にフランス語に押しよせてきているのだろうか。次の表は、いつどこから、どの位の数の語がフランス語に入ったかを示す統計である。

Siècles	XII ^e	XIII ^e	XIV ^e	XV ^e	XVI ^e	XVII ^e	XVIII ^e	XIX ^e	XX ^e	
Arabes	20	22	36	26	70	30	24	41		269
Italiens	2	7	50	79	320	188	101	67	10	824
Espagnols			5	11	85	103	43	32	3	302
Portugais				1	19	23	8	3	2	56
Néerlandais	16	22	35	22	32	52	24	10		214
Allemands	5	12	5	11	23	27	33	45	6	167
Anglais	8	2	11	6	14	67	134	377	75	694
Slaves	2			1	4	6	11	10	4	38
Scandinaves		19	7		9	8	3			46
Turcs	1			2	13	9	6	14		45
Persans	2			2	1	5	3	1		14
Hindous					1	4	8	5		18
Malais					4	10	6	5		25
Japonais, chinois					2	2	5	4	2	15
Amérique latine					36	25	21	7		89
Amérique du Nord						3	3	2		8
Afrique						1	3	8	3	15
Grecs	8	4	5	3	1	2				23
Hébreux	9	1	2	5	2	2	1	1		23
	87	84	143	151	595	549	443	630	101	2886

この表は、P. Guiraud が調べた統計である。⁴⁾ 一見して明らかなのは、この表では、国際交流が最も盛んであるはずの 20 世紀のデータが貧弱なことである。ギローの著『外来語』は、1965 年に初版が出ているが、実際には 19 世紀までの統計とみるべきであろう。これをみると、フランス語が最も多くとり入れた外国語はイタリア語で、824 語、それに次ぐ英語は 694 語、第 3 位のスペイン語は、だいぶ落ちて 302 語となっている。イタリア語の流入は、14 世紀から始まって 16 世紀つまりルネッサンスをピークにその後減少傾向にあるのに対し、英語は 17 世紀から加速的に増加してきている。果して 20 世紀の実情はどうであろうか。1968 年の第三版『ブチ・ロベール』（初版は 1967 年）を使って、見出し語に続く *étymologie* の解説を頼りに、英米外来語をすべてとり出し、年代順に集計したところ、次のような結果を得た。

世紀	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	総計
語数	1	7	2	4	5	13	60	143	406	365	1006

この辞書の編集主幹 A. Rey は、収録語彙は 1966 年までのものと *préface* で述べている。辞典の総語彙数については、五万語以上とあるのみで、正確にはわからない。今仮に 5 万語として、11 世紀から今日までの英米外来語 1,006 語は、全体の 2% にしかあたらない。外来語といっても、それぞれ辿る道は様々であろう。一時期もてはやされたものの、やがて時とともに忘れられるものも少なくない。しかし『ブチ・ロベール』に採録されたことは、一応市民権を得たものと考えてよい。しかし最も新しい統計は、恐らく、J. Rey-Debove が *Dictionnaire des Anglicismes* (1980 年, Paris) の序文で示している、次のような数値であろう。*Dictionnaire des Anglicismes* は 2,700 以上の語を収録している。そのなかから古くなったものを削除すると、約 1,500 語が残る。これは、現在の

フランス語の総語彙数を 60,000 とし、その 2.5% にあたる。使用頻度を考慮に入れると、この数値は更に下がる。G.J. Forgue と V. Klein の調査によれば、夕刊紙 *Le Mode* には、166 語ごとに 1 語の割合で英米外来語がでてくる。これは率にして 0.6% である。以上がこの辞典の *préface* で J. Rey-Debove が明らかにしている数値である。2% から 2.5% の英米外来語というのは、規制の厳しさを思うとき、余りにも低い率ではなかろうか。

IV. 品詞別にみた外来語

『プチ・ロベール』から抽出した 1,006 語の資料をもとに、英米外来語の実態を詳しく検討してみよう。品詞別に調べてみると、副詞 2、間投詞 2、動詞 26、形容詞(名詞となるものを除く) 34、名詞 942 語という結果になった。動詞 2%, 形容詞 3%, 名詞 94% であり、これから、英米外来語は大部分が名詞であることがわかる。名詞を除く副詞、間投詞、動詞についてまずみてみよう。副詞は (payer) cash, out (テニス用語で形容詞にもなる) の二語に限られる。間投詞も、allo, stop (名詞にもなる) の二つである。26 の動詞は、すべて er 動詞である。例外的に語幹の入れかえもあるものの *-furl > ferler*、英語の動詞の語尾に *-er* を加えることでフランス語の動詞となる。import > importer, stop > stopper, lynch > lyncher など。cokéfier のように、coke (コークス) をもとに、変化を表わす動詞語尾 *-ifier* を添えて動詞とすることもある。形容詞に至って、フランス語と英語の違いが表面化する。フランス語の形容詞の性・数の変化、とりわけ性の変化をどう扱うか。しかし実際には、男性形を女性形にするにあたって、それほど困難はない。大部分はそのままか、語尾をちょっとフランス語風に変えるだけでよい。*-ic* を *ique*, *-ed* を *-é*, *-ive* を *-if* など。なかに、フランス語の語尾になじまないものがいくつか残る。そしてそれは仕方なく、無変化ということになる *-shocking, groggy, sexy* など。

V. 名詞の性と数

数の上で最も多い名詞には、英米外来語の様々な問題が集中的に出てくる。まず性の問題について検討してみよう。英語をフランス語にとり入れるに当たっては、それぞれの語を男性か女性かに決める必要がある。英米由来の名詞を一瞥すると、名詞の多くは男性とされている傾向に気づく。女性名詞となるについては二通りのケースが考えられる。1) 語尾の綴りがフランス語の常識として女性語尾であるもの。2) 人物名詞で女性を表わす名詞のとき、の二通りである。

2) としては次のような名詞がある。

lady, miss, nurse, star, script-girl, vamp, starlet, (フランス風に *starlette* と綴る), *speakerine* (英語から入ったフランス語 *speaker* の女性形), *covergirl, taxi-girl* など。

1) の女性語尾の代表的なものとしては、*-tion, -té, -ance, -ence* などがある。英米外来語の中からこれに該当するものを拾ってみよう。corporation, pétition, coalition, aberration, exportation; réflexibilité, minorité, majorité, responsabilité; allégeance, performance, admittance; interférence, référence, fluorescence など。

語によっては、語尾の綴りが表わす性と、意味するところの性が対立することがある。そうした場合、どちらかが譲歩せざるを得なくなる。*dogue* (フランス語としては特に「番犬」をさす), *coolie* (クーリー), *bogie* (台車) などが語尾の女性形綴りに反して男性名詞とされたのは、意味が綴りより優位に立った結果であろう。1883 年に輸入された *interview* は、Hatzfeld の *Dictionnaire Général* では男性、Académie の辞典では女性として扱い、現在では女性名詞に落ち着いている。その根底には、*interview* が実はフランス語の *entrevue* から英語に入ったものであり、*entrevue* は女性名

詞という事情がある。scottish, garden-party, jeep が女性名詞なのも、それぞれの語にひそむ意味 danse écossaise, partie de jardin, auto ないし voiture といったフランス語女性名詞が作用したのであろう。なかには、bank-note のように、フランス語では、banque も note も女性名詞であるにもかかわらず、billet de banque の billet (男性名詞) が作用するためであらうか、男性・女性のどちらにも定まらないまま、使う人の自由に任されているものもある。

単数名詞の語尾に -s を加えれば複数名詞になるという大原則は、英語・フランス語に共通のものである。それゆえ、英米起源の外来語の複数形を作るにあたって、原則的にはなんら問題はない。問題があるとすれば、フランス語にはみられない変化のしかたをする英米語をどう扱うか、という点である。そのような時に、フランス語化した英語の辿る道は二通りある。英語を正しく採用して、不規則な変化をうけ入れるか、それを無視して -s ですませるかである。-y, -ch, -man などの語尾を持つ語に接したフランス人が複数を -ies とするか -ys とするか、-ches とするか -chs とするか、-men とするか -mans とするかは、個人の英語の知識如何によるという。多少なりとも英語を知っている人は、なるべく正しい英語に近づけようとするが、英語の知識のない人は、型通り -s を加えるしかないというのである。⁵⁾ 外来語が外来語として孤立することなく、移植された国語の中に組み込まれていくためには、必ずしも前者の方がベターだとは言いきれない。

-man, -y, -ch の語尾をもつ英米外来語には次のようなものがある。

gentleman, sportsman, policeman, barman, self-made-man; baby, lady, tory, penny, whisky, nursery, lorry, jury, dandy, tilbury; sandwich, match など。

これらの複数は、des gentlemans と des gentlemen, des babys と des babies, des sandwitschs と des sandwitches が共存しているわけである。

VI. 英米語に基づく訳出フランス語

「英米外来語」といっても、その実態は様々である。英語の中にも、生粋のゲルマン系のことば、ロマンス系をも含めて、他のインド・ヨーロッパの言語から英語にとり入れられたもの、植民活動によってアジア地域から入った語、インディアンを通じて米語に入ったものなどがある。このうちロマンス語起源の英語は、フランス語に移入してもよくなじむことは肯ける。しかしそれ以外の語は、多かれ少なかれ異質な要素を伴うために、それをどのように扱うかが議論的になる。外来語を嫌う人々にとっては、それをフランス語に翻訳してしまうやり方が理想らしく、Haute Comité の活動も英語をいかにスマートなフランス語に訳すかがその活動の中心となっている。しかし、異質なものの、母国語にない新鮮なイメージを求めた結果として外来語が広まることもあり、とにかくフランス語に置きかえればこと足りるという性質のものでもない。また、訳語が定着するまでには、それなりの時間が必要である。翻訳語としては、次のようなものがある。

wolf-dog>chien-loup, bluestocking>bas-bleu, railway>chemin de fer, free trade>libre-échange, self-service>libre-service, underdeveloped>sous-développé, supermarket>supermarché, outflow>hors la loi, full employment>plein-emploi, service station>station-service, honey moon>lune de miel, skyscraper>gratte ciel, living room>salle de séjour

英語の語順は、限定詞＋被限定詞がふつうであるのに対して、フランス語は被限定詞＋限定詞の方が一般的である。そこで、上の例でも、フランス語に訳す際に多くは、限定詞の位置を変えている。このように訳語が一応定着したものは、外来語全体からみるとほんのわずかであり、しかもこのうちのいくつかは、もとの英語と訳語が共存していて、railway, outlaw, skyscraper, supermar-

ket, self-service などは、英語のままでも使われる。特に self-service は、self と簡略化されて広く一般化し、libre-service を片隅に追いやっている。service, developed, station などの英語は、元来フランス語からの借用語であるため、フランス語に訳してもそれほど変わりようがない。また、訳語そのものについて、フランス本国と、カナダやアフリカのフランス語圏とでは微妙な差があるようである。アフリカのフランス語圏では、station service の訳語として essencerie が編み出されたといわれるが、⁶⁾ この語を載せているフランスの辞典を筆者は知らない。一方 living-room は、カナダでは vivoir と訳され、*Petit Robert, Lexis, Logos, Petit Larousse* には、カナダのフランス語として採録されている。vivoir の初出年代は明らかではないが、カナダではすでに定着しているのであろうか。フランスでは 1975 年の政令で、living room を禁止し、salle de séjour を義務として使わなければならないことに決めた。しかし実際には、英語、フランス語の双方ともに簡略化されて、séjour または living と呼ばれている。また、時の流れとともに underdeveloped の訳語 sous-développé (低開発の) も、現在では en voie de développement (発展途上の) にとってかわられた。科学技術用語など、正確を期するものには、訳語の統一も必要となろうが、それとてもやがては、新旧交代を免れるものではなかろう。

VII. 借用語の綴字と発音

純正国語論者たちは、とにかくフランス語とは異質なゲルマン系の要素が、そのままの形で母国語に入りこむことを嫌う。彼らにしてみれば、英語からの借用語であっても、それと気づかれないほどにフランス語化していればいるほど好ましいのである。完全にフランス語の中に組みこまれた好例としてよくあげられるものに、次のような言葉がある。

bowling-green > boulingrin (1663 年)

packet-boat > paquebot (1665 年)

riding-coat > redingote (1725 年)

()内はフランス語における初出年である。これらは綴りも発音もすっかりフランス語化されて、英語の痕跡を留めていない。いずれも複合語が単純語に移行していることから、二つの語を効率よく結合する過程でこのような語が生まれたのだろう。同じ複合語を単純語に改めるにしても、時代が降るに従って、一部省略するにとどまるものが多い。

pack ice > pack, tandem saddle > tan-sad, boy scout > scout, slow fox-trot > slow, navigation certificate > navicert など。

英語を翻訳してしまうか、完全にフランス語化してしまうかすれば、puriste たちの不満はなくなるに違いない。しかし大部分の語は、発音と綴り字をどの程度までフランス語化するかでとまどいつつ、人々の支持の最も多い形が定着していくようである。次の例は、英語の発音を多少なりとも生かそうとした結果、その音に合わせたフランス語内での綴字に、文字の方が歩みよったものである。

dog > dogue, carpet > carpette, supremacy > suprématie, trapper > trappeur, block system > bloc-système, penalization > pénalisation, challenger > challengeur, rocket > roquette, resistor > résisteur, effector > effecteur

英語の -er, -or は、フランス語では [-œ: r] と発音されることが多い。フランス語に入って、-er, -or のままのものもあるが、これらを -eur に置きかえる方向がひとつ確立している。また block system のように、それぞれを独立した単語として限定詞 + 被限定詞と並べることは、フランス語の語順と相入れないので、殆どの場合、ハイフンで結んでひとつの複合語の体裁を与える。

しかし、英語の発音を生かし、それにみあうフランス語の綴字をあてはめるには、少なくとも、その英語の発音を知っていなければならない。これはあらゆる人に期待できるものではない。移入された英米語をどう発音するかは個人によって違ってくる。英語の発音そのものと、純粹にフランス式の発音との間にいくつもの中間的な読み方が生ずる。例えば、英米外来語の outlaw を 17 人のフランス人インフォーマントに発音してもらおうと、次のような結果になるという。⁷⁾

outlaw	[awtlo]	8 人
	[utlaw]	3 人
	[utlo]	1 人
	[utlow]	1 人
	[utlav]	1 人
	[英語, áutlɔ:]	3 人

かなり個人差がみられるが、各種の辞典では、最も多くみられる発音 [awtlo] が採用されている。英語の発音そのもの以外に、ou は [u] と [aw], aw は [o, ow, aw, av] の四種類でている。ou についてはフランス式の [u] が 6 人、英語に近い [aw]—フランス語は二重母音を嫌うので、後続の母音は半母音化する—が 8 人と分かれる。aw はフランス語にない綴りなので、読み方も多様化するが、英語に近い [o, ow] が 10 人、aw を文字通り発音した [aw, av] が 4 人である。outlaw を純粹にフランス語流に読めば [utlaw] [utlav] になるのであって、17 人のインフォーマント中の 13 人は、英語の発音を多少なりともとり入れている、英語の outlaw を知っているものと推定される。しかしこの outlaw がフランスの文献に初めて現われるのは 1783 年のことであって、200 年の歳月がフランス語 outlaw の発音を大すじにおいて決定ずみとも考えられ、インフォーマントはそれを再現したにすぎないのかもしれない。その世間一般の発音も時代とともに変わるというから難しい。例えば lock-out は 1865 年に輸入された語であるが、かつてのフランス流の発音 [lɔkut] はしだいに少なくなり、今日では [lɔkawt] と発音されるという。⁸⁾

もうひとつ interview をみてみよう。⁹⁾

interview	[ɛtɛrvju]	13 人
	[ɛtɛrvjuv]	2 人
	[intɛrvju]	2 人

interview はフランス語の初出年が 1883 年である。-view の読み方は、英語に近い [-vju] が多いが、[-vjuv] と最後の w を読んでいるインフォーマントも 2 人いる。-iew という組み合わせは、元来フランス語には出ない綴りであるため、[-ju] としたところで異和感が残るだろう。英語の mildew [mildju:] (べと病) のように、初めは mildew [mildju] としていたものが、発音に綴り字を合わせて mildiou となったケースもある。¹⁰⁾ interview の語頭の in の発音は、フランス流の [ɛ] 15 人に対して英語式 [in] が 2 人と、フランス式が圧倒的に多くなっている。しかしこれも、in を含む他の英米外来語にあたってみると、言葉によって [in] と [ɛ] にはっきり分かれ、何が両者を区別する要因なのかは判然としない。[ɛ] と読む英米外来語には、dingo, interférence, interlude, introspection, réintégration, singleton などがあり、これらは完全にフランス語に同化している。一方、flint (-glass), bow-window, links, single, spin, twin-set, pin-up などの in は英語式の [in] もしくはそれに近い音を保っている。なお、interview の派生語で、動詞 interviewer (インタビューする) になると、[ɛtɛrvjuv] と w [v] の音が生きてくる。

英語がフランス語に輸入されて定着していく過程でその発音をどうするか、二か国語の狭間で中間的な妥協策が生じやすいのであるが、Fouché などは、どっちつかずな発音は避けるべきだ、とい

う意見である。彼によれば, outsider には, 純粋にフランス式の [utsidɛ:r] と, 英語に近い [awtsaj-dœ:r] [awtsajdər] があるが, 両者を取りまぜた [utsidœ:r] や [awtsidœ:r] は採用すべきではないという。¹¹⁾ Fouché 教授はその著 *Traité de Prononciation Française* で, 英米外来語および英米系固有名詞の「フランスにおける発音」を, 膨大な例を示して詳述しているが, 現在これらすべてを文字通りにうけとることには慎重でなければならない。発音の傾向も時の流れとともに変わるからである。一例をあげれば, Fouché は lock-out について, 上述のように, その発音はかつての [lɔk-ut] にかわって [lɔkawt] が主流になっているとした後, 「しかしそれから派生した動詞 lock-outer が [lɔkute] であることは紛れもない事実だ」としている。¹¹⁾ だが近着の辞典によれば, 動詞も名詞と同じ [lɔkawte] になっていることがわかる。¹²⁾ 一般的に, 現代に近づくほど英語の発音を生かそうとする傾向がみられる。

フランス語のアクセントは, 特に強調した表現や, 文の流れの中での強弱を考慮に入れなければ, 一般に語末の音節にあることはよく知られている。そしてこれは, 他の外国語に較べて非常に弱い。英語からフランス語に入ったことばも, アクセントは殆ど語末音節に移される。語末音節にあるとはいえ, 英語の強いアクセントからみると, それらは極めて平板な響きとなる。

VIII. 語義の変遷

英米外来語といっても, 翻訳から, 音も綴りも英語そのものの形の言葉まで様々であることをみた。ところで元の英語にしても, 生粋の語ばかりではない。既に述べたように, アジア・アフリカなどの植民地からとり入れた言葉や, フランスをも含む他のヨーロッパ語起源のものも多い。英仏海峡を行ったり来たりする言葉もかなりある。例をあげれば, ラテン語 humor は, 「液体・湿気・体液」を意味した。12 世紀にフランス語に採り入れられたこの言葉は, 「体液」から人の性質・気分をも意味するようになり, あるいは「上機嫌」を, またこれと正反対に, 「不機嫌」を表わした。しかし時代が降るに従って, 前者の意味は薄れていく。ところが 17 世紀末にフランス語からこの言葉を借用したイギリスではまったく逆で, 悪い意味では使われなかった。そして 18 世紀になって, 「人の気分」という意味では, 「不機嫌」しか表わさなくなっている名詞 humeur を持つフランス語に, イギリスの humour が逆輸入されるのである。イギリスからみれば humour はフランス語からの借用語である一方で, フランスからみれば humour は英語からの借用語なのである。もうひとつの例をあげよう。形容詞または名詞として「信心深い, 信心深い人」という意味で bigot という言葉がある。フランス語で bigot がこの意味で使われた最も古い文献は 15 世紀のものである。bigot がゲルマン系のことばであることは誰でもが認めるところであるが, どのような経路でフランス語に入ったのか。語源学者たちは, bigot の最も古い記録を, 12 世紀のアングロ・ノルマンの詩人, Wace の書いた, ノルマンの歴史物語 *Roman de Rou* の中に求める。Wace はこの中で, bigot をノルマン人に対する渾名として使っているという。ゲルマン系の文献で遡ると, 中世英語に最も早く be godd (1300 年), be gode (1330 年) が確認できることから, Wace の bigot の起源は英語にあるとして, bigot は英語からフランス語に入ったという説をフランスの語源学者たちはとっている。¹³⁾ ところでこの bigot は, 17 世紀になってフランスからイギリスに輸出された。したがって bigot の場合は, humour とは逆に, 本来ゲルマン系の言葉がフランス語にとり入れられ, そこから再び元の言葉に逆輸出されたことになる。フランス語にとっては英語からの, 英語にとってはフランス語からの借用語なのである。このように言葉は時間的にも空間的にも旅をしながら, 語義・発音・形態が少しずつ変っていく。英語からとり入れられた語が, フランス語として, 英語にはない語義で使われることもある。英語から少しでもずれた意味を荷わされたことばは, “faux anglicismes” とか “pseudo-

anglicismes”といった、異端的なニュアンスのレッテルを貼られる。speaker [spikœ:r] は英語の speaker から三回にわたって異なる語義がとり入れられた。① 1649 年（英国・米国の）下院議長、② 1904 年、スポーツ試合の結果を観客に発表する人、③ 1933 年、ラジオ・テレビのアナウンサー、以上の三つである。しかし英語の speaker には、②、③ の意味はない。② の意味は、現在フランスでは廃れてしまっているので、さして問題になることはない。③ について、アナウンサーのことは英語で announcer といい、フランス語にも annonceur なることばがあることから、技術用語を検討する国の機関では、speaker の代りに annonceur を使うよう勧めている。しかしフランス語の annonceur は、従来、「新聞・ラジオ・テレビ等のコマーシャルのスポンサー；コマーシャル製作者」を意味した。他方、1933 年にフランス語に入った speaker は、女性形として speakerine を生み、téléspeakerine なる派生語まで作られたのであるが、近着の辞典によれば、今日では流行遅れになってしまい、annonceur、または présentateur を使うという。¹⁴⁾ Haute Comité を中心とする国の方針が徹底した結果であろうか。

「外来語」の範疇を逸脱するかもしれないが、英語の影響で、従来からあることばがその意味領域を広げることもある。動詞 réaliser は、本来、「réel にする、実現させる」という意味であった。ところが 1900 年頃から、英語の動詞 realize をフランス語の réaliser に重ね、「分かる、理解する」の意味で réaliser が使われるようになる。こうした傾向を忌み嫌う作家・純正国語論者たちの非難をよそに、この新しい語義はかなり広く使われるようになって、今日では、Anglicisme の但し書きつきながら、ほとんどの辞典に載るまでになっている。名詞 approche もこのようにして意味領域を拡げた語である。フランス語の approche は、元来「近づくこと、接近」という意味であり、英語の approach の持つ「問題への取り組み方、アプローチ」という語義はなかった。ところが 20 世紀の半ばに、英語からこの語義がとり入れられた。こうした語義だけの借用は、新語として表面化しないだけに、puriste たちにとっては、一層我慢ならない英語の侵入と写ったに相違ない。しかし英語のお蔭でその語義がより豊かになったと考えれば嘆くには当たらない。新しい意味が採用されて一般に広まったのも、その必要があつたこと、時代とともに言葉が変わっていくことについて、外国語の影響だからという理由でその流れを塞ぎ止めることもないと思われる。

IX. 派生語について

H. Mittérand は、Nyrop が挙げている 175 の接尾辞、『ラールス百科』（1961 年度版）に載っている 155 の接尾辞のいずれのリストにも、「現代語のある種の分野で英語起源の語が成功をおさめた結果フランス語に移植された、-ing と -er (camping, parking, caravanning, reporter, speaker, leader) が除かれている」と述べて、英米系の -ing と -er も、フランス語の接尾辞の中に加えるべきだともとれる見解を示している。¹⁵⁾ -er のつく英米外来語には次のようなものがある。speaker (女性形 speakerine), quaker (女性形 quakeresse), leader, bookmaker, manager, gangster, sparring-partner, supporter など。employeur, planteur は、-er の部分をフランス語化して -eur としたものである。challengeur, challenger; supporteur, supporter のように両者が共存しているものもある。語尾 -er は、フランス語の既存の語尾 -eur と機能上似ていることもあって、フランス語の内部では、新たに -er を独立した語尾として受け入れる必要はなさそうである。

-ing を持つ英語も数多くフランス語にとり入れられた。rowing(漕艇), planning(計画), fading(フェーディング現象), karting(ゴーカート遊び)などは英語そのものと変わらない。meeting は英語と違って、① 政治討論会、② スポーツ競技会と、①、②ともに特殊な集会を意味する。フランス語での holding(持株会社), sleeping(寝台車)は、英語の holding company, sleeping car の後

半を略したものである。従って英語では、holding, sleeping だけで「持株会社」,「寝台車」を意味することはない。同じようなことが次の場合にもいえる。フランス語の skating, camping, bowling, parking は、「ローラースケート, キャンプ, ボーリング, 駐車」そのものを意味しないわけではないが、英語の skating rink, camping place, bowling saloon, parking ground の意味の方が一般的である。dancing に至っては、dancing hall の意味しかない。一方、本来の英語では、skating, camping, bowling, parking, dancing といった語が単独で場所を表わすことはない。フランス語の pressing 「クリーニング屋」についても、pressing+名詞で「クリーニング屋」を意味する英語はない。このように語尾 -ing で終る外来名詞が、多くは場所を示すことの多い現実をふまえて、-ing を、「ある行為がなされる場所」を表わし、英語にはないフランス語独自の接尾辞である、と考える文法家もでてきた。¹⁶⁾ pressing 「クリーニング屋」は、確かに英語にはない、いわゆる pseudo-anglicisme であるが、動詞 press は英語からの借りものである。-ing がフランス語起源の動詞の語尾に付加されることにでもなれば、-ing は接尾辞として独立したものと認められよう。しかし -ing の前にフランス語の動詞不定法を置くことは、語形からいってまず不可能である。footing (健康のために歩くこと。英語の foot と -ing から造られた。今日では jogging にとって代られつつある。) のようなフランス製英語が生まれる可能性は否定できないものの、-ing がフランス語の体系に組み込まれることはあるまい。

接尾辞とはいえないが、英語の -man (-woman) にも、-er や -ing に近い働きが認められる。gentleman, sportsman, policeman, yachtman は英語からの借用語である。しかしフランス語の recordman, recordwoman; tennisman, tenniswoman に相当する英語はなく、(英語で record holder, tennis player) フランス製英語である。

X. 結 び

外来語はその 94% までが名詞であるという統計から、英米系外来語名詞の呈する様相を辿ってきた。その結果言えることは、英語の侵入によってフランス語が減ばされてしまうかのごとき Etienne らの意見は、まったくの妄想にすぎないということである。その発展の過程でがっちりと構築されてきたフランス語は、数パーセントの異質な英米語が紛れこもうとも、微動だにしない。外来語に対する意見は三つのタイプに分けられる。強硬反対派、ある程度規制する必要ありとする中間派、寛容派である。寛容派の Martinet らは、厳しい言語政策によってフランス語の生命力が枯渇してしまうのではないかと危惧している。伝統の国イギリスには、King's English というものがありながら、国民がそれに縛られたりすることはない。それにひきかえフランスでは、と Martinet は嘆く。¹⁷⁾ 分野によっては、外来語といえども、その内容をはっきり定義し、誤解のないように用語の統一をはかる必要がでてくることもあろう。しかし科学技術用語ならともかく、言葉はそれぞれ、独自のイメージ、雰囲気を伴うのが普通である。salle de séjour というフランス語があるから、living (room) という英語は要らないということにはならない。母国語では出せない斬新さを外来語に求めるのは洋の東西を問わず言えるらしく、フランス語の中の英語にもそうした面がうかがえる。しかしイメージ、雰囲気というものは、時とともに移り変わりも激しく、流行遅れになったものは消え去り、自然淘汰によって必要なものだけが残るであろう。フランス語の祖語ラテン語は、北方ゲルマン民族から戦さに関する多くの語彙を採り入れた。またルネッサンス期から 18 世紀にかけて、700 以上のイタリア語がフランス語にもたらされた。そしてそれらはいずれも、フランス語を豊かにすることに貢献している。フランスの強硬な言語政策を徹底して実施するなら、こうした文化の交流を絶ち切るしかないのではあるまいか。

18, 19 世紀まで、フランス語は外交語として確たる地位を保ってきた。19 世紀までは、世界の政治・経済は、限られた特権階級の手握られていた。そうした貴族階級に相応しい言葉としてフランス語は洗練されてきた。1647 年、*Remarques sur la langue française* で Vaugelas が説いた “Bon Usage” 「良き慣用」とは、宮廷人の言葉を基準としたものであった。しかし、フランス語にとって不幸なことに、時は移り、20 世紀は大衆の時代となった。社会・世界情勢とともに言葉も変わらざるをえない。フランス語は、かつて征服者ノルマン人のことばとしてイギリスに上陸し、数世紀に渡ってイギリスを席卷した。フランス語から英語に入った語彙数に較べれば、数パーセントの英米系フランス語は決して多くはない。英米語に限らず、外来語にもっと寛容である方がフランス語の将来には好ましいのではなかろうか。

〔注〕

- 1) 本稿は、1983 年 1 月に、三番町英文学談話会において口頭発表した原稿を補筆発展させたものである。
- 2) Etienne (1980) p. 348.
- 3) Quid (1981) p. 650.
- 4) Guiraud (1971) p. 6.
- 5) Grevisse (1964) p. 239.
- 6) *Dictionnaire des Anglicismes* (1980) p. 978.
- 7) *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel* (1973) 参照。
- 8) Fouché (1969) p. 190.
- 9) *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel* (1973) 参照。
- 10) *Grand Larousse de la langue française*, Tome 4 によれば、1874 年には mildew, 1883 年には mildou が確認できる。
- 11) Fouché (1969) p. 190.
- 12) *Le Robert & Collins, Dictionnaire des Anglicismes, Le Robert Méthodique* 参照。
- 13) *Nouveau dictionnaire étymologique et historique, Dictionnaire étymologique de la langue française* 参照。
- 14) *Dictionnaire des Anglicismes*.
- 15) Mitterrand (1963) p. 38.
- 16) *Dictionnaire des Anglicismes*, pp. 684, 771.
- 17) Martinet (1974) p. 25.

〔参 考 文 献〕

- Etienne, R.: *Parlez-vous français?* (Gallimard, 1980).
- Fouché, P.: *Traité de prononciation française* (Klincksieck, 1969).
- Grevisse, M.: *Le bon usage* (Duculot, 1964).
- Guiraud, P.: *Les mots étrangers* (P.U.F. 1971).
- Martinet, A.: *Le français sans fard* (P.U.F. 1974).
- Mitterrand, H.: *Les mots français* (P.U.F. 1963).
- Dictionnaire de l'Académie Française* (1964).
- Dictionnaire Général de la langue française* (1964).
- Nouveau dictionnaire étymologique et historique* (Larousse, 1964).
- Dictionnaire étymologique de la langue française* (Bloch & Wartburg, P.U.F. 1968).
- Petit Robert* (Société du Nouveau Littre, 1968).
- Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel* (Martinet & Walter, France-Expansion, 1973).

Le Robert & Collins (Collins, 1978).

Dictionnaire des Anglicismes (Les Usuels du Robert, 1980).

Le Robert Méthodique (Le Robert, 1982)

Journal officiel de la République française, 18 janvier 1938 ; 16 janvier 1976 ; 4 janvier 1976.